

---

## 咎人の翼 ~ 序章 ~

Cadenza

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

咎人の翼〜序章〜

### 【Nコード】

N3399C

### 【作者名】

Cadenza

### 【あらすじ】

高校生にして世界の頂点に立つ翔風貴吾の物語

## 二人の俺

俺は教室の片隅で国語の授業を聞いていた。

特に変わったこともない高校二年生

はつきり言って普通他人と違うのは身体と性格、能力位なものであまりに普遍すぎる生活

をしている。

別に不満な訳じゃない。

特に疲れている訳でもない。

後十分弱で授業も終わる。

そうすれば休み時間だ。

一般的に言って休み時間と言うものは十分程、寝るには短いとても後五分・・・早く終わりがれたるい事この上ない。

三分・・・

二分・・・

一分・・・

よし！！終わった。

うちの学校にはチャイムと言う物がない故に授業がよく長引く

『早く終わりがれ』つい口に出てしまう

あゝ休み時間

あつと言つ間に終了

使えん使えなすぎる

『ナメトンノカイ』

二限は

Or al C o m m u n i c a t i o n 1とか言つ英語なのだが・・・  
教師がうざい何故か授業マイクを使う。

余程マイクの感度が良いのか鼻息がかかっただけで反応する「声出

せ」面白いように声

は出ない。集団boycottだろうか？

なんか言ってますがみんな無視・・・露骨に無視「ははは」もう笑うしかない

詰まらんし自己紹介がまだだったな

俺は貴吾

しょうなぎぎあ  
翔風貴吾

まあ・・・気にすんな

身長は166cm

体重57kg

性格は二重人格いや本物の。

つうわけで性格は二つある

今は主人格なんだがあんまし出たくないだるい

口癖は「だるい」だと思う。

別人格についてはまあ追々語ることにしよう。

なんかいつの間にか授業が進んでんだが気にしないはつきり言ってる関係ないね。

日本人なら日本語使え！！

なんだが長引きそうだ。

あんまし楽しいものじゃない

はあ休み時間

「次の授業はなんじゃらぽん」

正直科学技術理論良く分からん

気がついたら授業終わってるしまあ関係ないか？

いいか、次は四限、終われば昼休みなのだ。

この学校は購買部がない故にパン販売が来る。パン販売には裏メニューがある。

普段弁当無しが予約するのだが裏メニューは予約できない

如何にに速く一階に着くかが裏メニューを手に入れる必要十分条件である。

最近俺はアグレッシブインラインスケートをやっている。  
要するに鉄柵を滑走するやつだ。

その応用編で階段の手すりを滑り降りるまさに滑降つつやつだ。  
普通下るのに二分この方法なら三十秒4分の1に圧縮できる。

気合いだ！！

そんなにまでして手に入れるパンはそんなに美味しいのか？と言われ  
るとそうでもない実際、需要と供給があってない。

そのため買い占めに走る奴がいる。

だから走るのだ

だがまだ四限、余裕だ。

また気がついたら授業終わってるし・・・。

昼休み

自席で苦勞して手に入れた飯を食っているといつものメンツが集ま  
ってくる。

右から三島菜実身長が147cmしかない。たまに見えないでぶつ

かる。

そのとなり影が薄いのは・・・はて？誰だっけ？

青柳秀司やなぎしゅうじだったっけ？もう良く分かんないから次。

宮良隆士みやらりゅうしいざと言うとき頼りになる。

電気系に強くAudioVisualが専門。

その奥にいるのが坂牧和也さかまきかずやいわゆる天然記ピー！。

兎に角エロい。

ArcadeGameのDrumOtakuでスキルポイント10  
00を超える強者。

その横にいるのが

仲里要軍事マニアなかざとよう特に第二次世界大戦が好きらしい。

坪口弘行大食漢つばくちひろゆき。

兎に角年中食いまくる。

その前で暴れてるのがありまたいさ蟻真大佐と鍋木 Weckl

《かぶらぎウエック》鍋木の方はロシアと日本のクウォーターだとか（汗）本当か？まあ二人はセットで覚えとけ

そんなもんか。

「なあ今日どうする？」宮良が聞いてくる。

毎週月曜日は金糸町のゲーセンに行くのが恒例になっている。

「どうしようかな」今日は金がない。

作るか？

「行くかも」と答えておく。

ちなみに作るとは

偽札という訳じゃない。が、『化学系理分再術』と言うやつを使う。はつきり言って一般

には錬金術と呼ばれている。

この学校は『理分再術』を扱えるようになるための学校なのだ。とは言っても普通の学校

と違うのは科学の授業多いし理分再術の授業があるということだけだが。『理分再術』とは

理解分解再構築術

の略称であり現在最高ランクの科学であり難易度も半端じゃない。

それ故、悪魔の研究とか言われてたりする。

危険も多いし偏差値も相当高い連中が集まっている。

元々この学校は国立で偏差値が高い

上一般には入れない

俺の周りの連中も例外では無く偏差値70超えがゴロゴロいる。ま

あ俺は例外で60程しか

いがそれは実技推薦で入ったからだ実技推薦は100人に1人入れるか入れないかとか言うレベルらしい良く解らん。

学校の設備はどっかの大学並みの馬鹿げた研究施設がある。

理分再術は誰でも出来る訳じゃない。

魔銃、

魔剣、  
魔槍、

身体の特徴として魔眼をもつ者のみがこれを行使出来る。

まあどうでも良い話だが俺は魔眼と魔銃剣と呼ばれている特殊な宝具を使っている。通常、剣、槍などの力を使って陣を書いたり、銃に魔弾を装填しその力で変化を起こす。

だが魔眼持ちは違う。眼や手だけでこれを行使出来る。まさに化け物だな。俺は眼じゃ出来ないが手を合わせて考えた通りに出来る。それぞれ宝具と言われたりする道具を持ち歩いてるんで学校内はかなり変な光景が広がる。

刀をぶら下げた奴もいれば槍を背負ってる馬鹿もいる。

俺は持つてこいと言われない限り持ち歩かない重いしだるい。チヨチヨイと紙から諭吉さんを創ってゲーセンに行く。

わはは見たか現代科学の力。

「オセーヨ貴吾」

坂牧が言う。

「ウルセー全力で黙れ」答える。

「で？誰が最後だ？」

聞いて見るが「未だ俺だよ」と森谷答える。  
もりたにまさく

森谷正人はクラスが違うが一年の頃一緒だった。

「分かった順番とつとけ」

両替をしていない。何ら問題なく両替機に吸い込まれていく百円玉  
×10と漱石さん九人が出てくる。

投影（複製を作り出す技術）は成功したようだ。

両替をすませて戻ってくる。

なんか森谷はあっさりゲームオーバーになっている。

「俺の番かよ」ちよつとビツクリ・・・森谷はかなりうまいんだがまあ調子が悪かったんだろう。

無難にこなして次に廻す。なんかだるいな、まあ気にしない関係ないし。

大人数で回していたため全部で五回しか出来なかった。

「もう七時か」

坂牧が自慢のwinを取り出して言った。さすがにもう帰るか親ウルセーし。

まあ今から帰っても八時位だが。

家に着くとすでに飯は出来ていた。

上着とYシャツを脱いで椅子に放る。手を洗って飯を平らげ部屋に行ってパソコンでネットをする。

毎日同じ流れだこれを変えると朝起きられない。

ネットで自分のページを更新して宮良のページを覗く何もないようなので退避。

「寝るか」何もすることがないので寝る事にする。ちなみに風呂は入らず朝入って行く。

眠りにつく直前。ケータイが鳴りやがった。

「はいどちらさんですか？」不機嫌に聞くと、

「何を怒っている？新宿で理分再術師が暴れ回っている。なんとかしろ。」

「タダイマデンワニデルコトガデキマセンピーツイウハッシンオンノアトニメッ・・・・・・」

「くだらんこと言つたらんではよこいなみに香奈恵ちゃんには先に行ってもらったから悪しからず。」

「はあ？まてジジイ香奈恵を引つ張りだしたのか？死ね馬鹿被害者増やしてどーすんだ？このタマナシ不能野郎！」

「プーップーップー」

切れてるし。

はあだるいが行くしかないか。

「・・・・・・新宿か」

香奈恵と言うのは、フルネーム長田<sup>ながたかなえ</sup>香奈恵俺の小学校からの友達で攻性理分再術師をやっている。



俺は面倒くさがってそう簡単に出ていかないから香奈恵が出しに使われるようになった。

今電話してきたのは内閣府の草薙と言う男で性格がめっちゃ悪い。

兎に角着替えて新宿に向かう。向かうと言っても電車や車ではなく空を飛んでいく。

高速で構築式を展開『WING』の理分再術を発動新宿までおよそ五分それまで持つかどうか解らんまあ良いか関係ないしとは今回ばかりはいえない他の馬鹿は死んでも構わないが香奈恵だけは死なせるわけにはいかない。

始まってからもう何時間も経っているかと思うくらい一分一秒が長い恐ろしく長い理分再術師との戦いは何度も経験したがこんな奴は初めてだ。

一気に三体の龍クラスのキメラを作り出してなお攻撃の手をゆるめない。

油断した。右足をやられた。しかし相手も相当キている。そこに勝機がある。

敵は三体の”龍”をさらに一つに合成しようとしている。

好機これを逃したら次はない。

全力で踏み込む！！刹那上から龍の尾が降ってくる！！やばい・・・  
「・・・ローアイアス」

新宿に着いて当たりを探す。

見えた。

彼処か！！

音速を超えてなおスピードを上げる！！

あの爆発は尋常じゃない。

いた！！

「いきなりピンチかよ」

さらにスピードを上げ突っ込む！！

「・・・ローアイアス」無敵の盾の投影を即座に展開する！！龍の尾を受け止める。

渾身の力で跳ね返す「大丈夫か？お姫様怪我ないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・余計なお世話よ」

「痴話喧嘩は後だまずは彼奴を消しとばす！！」

突っ込む先刻のスピードを遙かに凌駕し右手に握られた剣を渾身の力で降り抜く龍は音を

立てて両断される。

一体目

「貴吾！！後ろ！！」

「だい じょう ぶ！！」

回転しながら構築式を展開濃硫酸を射出龍の足を止めてさらに同時構築式を展開電熱を刀

身に注ぎ込み堅い鋼のような鱗を一気に溶かし斬る。

二体目

さらに構築式を追加展開電熱を利用し水を水蒸気に変える！！辺りに霧が出来それに身を隠す。

さらに力技で酸素と水素を合成同時に避雷針を龍に向け射出、電気が発生、水蒸気を伝い龍に直撃。

三体目

「ふう終わったかな？」さっき見えたのは三体これで終わりなはずだな。

「もう終わりか？」後ろを向き香奈恵に聞くと  
「後ろ！！」香奈恵に突き飛ばされるが踏ん張って退かない。龍の  
一撃をともに食らった  
のは初めてだな・・・そこで意識が遠退いていく。  
薄れていく意識の中で  
「後は任せる貴吾」  
たしかにだが不明瞭な声を聞いた。

急激に背中が熱くなってくる。手に持った剣は強く輝き、魔眼は蒼  
から金へと変わり切り  
の空間を威圧していく明らかに先刻の男とは違う怪物がその位置に  
立っていた。

「座つてろ」男は一言だけいって振り向いた。

それからどれくらい経ったのだろう気がつく俺は龍の死体と術者  
の男の頭の上に座って

いた。「またやつちまったか。」呟く手の下にあつた頭を投げ飛ば  
して立ち上がった。な

んか周りの人たちが何か怯えてるんですけど（汗）

とりあえず俺が（別人格）壊したと思われる建物を修復。

「ねえ今のは貴吾？」香奈恵がビクつきながら聞いてくる面白か  
つたので

「何だテメー」と言ってみると

何か泣きそうなんすけど・・・

「・・・分かった俺が悪かった」素直に謝ってまず足にあつ  
た傷を治してやる

「あゝ泣いちゃった？」

「ごめん。ごめんなさい。ちよつとした冗談だったんだよなあ頼む

から機嫌直してくれっ

てゝ」必死で弁解。しかしこの女、俺の予想を遙かに超えた策士だった。「じゃあなんでも

言う事聞いてくれる？」

はゝっ？脅しですか？今後に及んで？

無難に「出来る範囲で頼む。」と言ってみる。

「じゃあさっきの何？」

さっきの？

「さっきのと言いますと龍にブツた斬られた後？」

頷く香奈恵。

「あれは俺じゃあない。剣鏡（けんきやう）って言う別人格な訳だから何をやってどうし

たのか解んないしそれにあいつが強いのは今に始まった事じゃないし。」

嘘だろって言う目でこっちを見んな

「嘘はこれっぽっちも無い。」

「本当　なの」

香奈恵が聞いてくる「じゃあどうしたら良いわけ？」

「だって剩りにヤバ過ぎだったもんあんなの鬼か悪魔だよ？」

「あいつは・・・そんなもんじゃない！！」

怒鳴った。

そうあいつは悪魔でも鬼でも無い。

そんなもんじゃない「人間だよ。あいつは普通の人間以外の何者でもない！！」

なんで人は強い奴とか異型の奴を化け物呼ばわりすんだ。

絶対におかしい。同じ人間なのに・・・

きつと人は自分と違うものを神だ悪魔だと言ってきたのかも知れない。

『あんなの鬼か悪魔だよ』 か。いつも助けたのに鬼だ悪魔だと罵られ唯の一度も人間として呼ばれたことはなくいつも一人の人間の影としてその身を置いてきた。魔眼と呼ばれる眼を持ち、伝説の剣の片割れを手にも多くの人を切り時に英雄と呼ばれたこともあった。

今まで俺を人と呼んでくれたのは一人でも今回の器は俺を人と呼んでくれた。

だからコイツの為に俺が出来ること、コイツが傷つき倒れたときコイツが還るべき身体を守ることとコイツの守るべきモノ総てを守ること。

俺に出来ることはそんなもんだ。

二人の俺が持つ剣は伝説の剣の剣銘はエクスカリバー。余りに有名なこの剣の所持者の影として俺は存在している。いやこの剣は俺であり俺はこの剣だった。

コイツは俺にとって五人目の器だった。今まで四人が四人回りくどい説明をしてきたがコイツは『お前はそういう存在なんだろう？』で片づけてた。

もう一人最初の俺の所持者は女の子だった。その少女には剩りに重すぎる王の役目を背

負っていた。それまで俺は存在していなかった。確かあれは彼女との最後の戦いだったと思う。

町の人間に反旗を翻したとき結局仲間裏切られて深い眠りについたその時『俺』は刀身と柄の二つに分けられ湖に封印された。

しかしながら昔は伝説の名剣とまで呼ばれた『俺』にも今は人としての名がある。

## 剣 鏡

今の器（相棒）が付けてくれたものだ。理由は『俺はこの剣自体だ』と言った事で『この剣は鏡みたいだから』だそうだ。安易な名前だ

が嬉しかった。

俺は剣であり人では無い。

なのにコイツは名前をくれた人から貰った二つ目のモノだった。いつの間にやら俺はコイツの思い通りに成っていたのかも知れない。

---

あれからどうやって帰ってきたのか分からない。信じられないが新宿から帰って来るまでの間の記憶がない。そうだ香奈恵は大丈夫だろうか？電話してみるか。

まくらもとのケータイをとり電話をかけてみる。

「どうしたの？アンタから電話なんて珍しいね？」

「昨日の今日だから大丈夫かな？と思つてな」

なんかコイツ嬉しそうだな？しかし意外な返答が返ってきた。

「何が？」

何もかにもない。

「体に決まってるんだろ！！女の子なんだからもう少し体を大事にしろよ」

「心配してくれてんの？ありがとうでも傷はアンタが治してくれたしどこも痛いところとかないしそれにアンタ心配してくれたから苦しいどころか嬉しいよ！！」

そうかそれで。

「そいつはよかったでも女の子なんだから危険なことはやめてくれ俺たちの体が保たん。」

「俺たち？」不思議そうに聞いてくる。

「俺と鏡だよ」簡素に答える。

「鏡君？貴吾の別人格の？何で？」

「そう・・・別人格の俺が気失った時助けてくれただろ？俺たちは二人ともおまえが心配なんだよ。」

嘘のない心からの本音頭で考えるよりも先に口に出たようだ。自分でもよく分かんがまあ良いか考えててもだるいだけだし。

少し話した後電話を切る。香奈恵も大丈夫そうだったし学校行くか。時計を見ると午後の五時を回っている。

つまり結果としてサボってしまったらしい。

うーんしまった皆勤賞を密かに狙っていた俺としては痛手だが考えるだけ無駄、過ぎたことは忘れてゲーセンでも行くか。

金糸町にある meat 屋と言うゲーセンはいつも人が少ないため気楽に遊べる meat 屋に着くと宮良たちが居た。

「いよう（。）。」ノ諸君元気か？「何となく聞いてみる。

「いよう（。）。」ノじゃねーなりおまえ大丈夫なのかよ？昨日、新宿で龍四体ブツた斬ってきたんだろ？」

何故か事情を把握しきっている坂牧が答える。

「何でそんな事知ってたよ。」

「やっぱりニユースでやつとつたよあれは貴吾の仕業だなと思ってたら学校休んでたしな」

何？もうニユースに成ってるのか？馬鹿なマスコミがこの世から無くなることを切に願うよ。

「まあ良いけど、宮良あ授業どんな感じ？」

一日休んだんだから新しいところをやられてないと良いが・・・。

「現代史でおまえのとこやってたよ人体錬成のヤツとか」

何？もうそんな所なのか？

「学校当分休もうかな？どうせ質問責めに合うし。」

今までにも人体錬成の話が出る度に俺が質問責めに合う。ふざけんな俺を誰だと思ってやがんだ？全く邪魔でしようがない。

初めの頃は良かったが今は答えるのがだるい。

「ちゃんと学校に来なさい」

後ろにいた三島に言われた。

「普段サボってるヤツに言われた無いわい」

返す。そんな事をしていたら

「あゝれゝ翔風じゃなかゝ」

と前から付き合いの合った阪田祐樹さかたゆうきがやってきた。

「なんだよ文句があるんかい」

何となく聞いてみる。

「学校休んでゲーセンで遊んでるんかい？」

「悪かったな別にサボりたくてサボったわけ違うわ」

妙な関西弁になる。

昨日あった事今日サボった理由を話す。

「なんかいろいろ大変だな。そりゃ儲かるだろうからしかたないだろうけど」

そりゃそうだ何てったって最年少で国家理分再術師に選ばれたあげく世界で初めて人体錬成をやったのけた天才扱いなんだから多忙でない訳がない。

「当たり前だ俺は国家理分再術師だぞ龍を斬る事もあれば人を斬る事もある。儲かるからしかたないだあ？国家理分再術師舐めてんのか？」

ちよつとムカついた。

何も知らない青二才が俺の事を分かった口利きやがって俺の仕事はそんなに簡単じゃない。

とまあちよつと怒ったがいいかだるいし。

本当は少し悲しかった。誰も唯の一人も本当の俺を理解してくれてはいなかった理分再術は確かに便利な能力ではあるだがそれなりにリスクを背負って生活している。

夢や希望もなく。

唯、淡々と仕事をこなしている。

「何時だって俺たちは悪者だった死神だ悪魔だと言われ続け助けに来て追い返される。そんなんが良いのか？おまえは、」

何でキレてんだ俺は？まあいいやとにかく俺は眠い。

「帰る」

その場にいるのは気まずかたつたし眠かった。帰って寝ているとまた電話が鳴った。

「はい？どちら様でしょうか？」ディスプレイを見れば分かるのだ



が。

「急を要する。わけでは無い。最近アメリカで人体錬成が行われ失敗したらしい」

電話の相手は草薙だった

「馬鹿だな人体錬成を失敗すれば不完全な人造人間がキメラになっちまうぞどうせ心理も見えて無い好奇心研究者どもがやったんだろ？」

「推察の通り」

「つまり今回は合成神の相手しに行かなきゃ行けないんだろ？」

合成神と言うのは不完全な実験によって出来上がるいわば「ヒト」に似た物つまり「ヒト」になるはずだった物の残りがすが生き延びようと周りに在る物を飲み込んで成長する怪物なのだが。

「あれは幾らなんでも俺だけだと倒せないぞ」

文句を言ってみるが。

「大丈夫すでに東都と香奈恵君に依頼してある。2日後の3415便で行くからな」

死ぬこのクソジジイ厄介事増やしがって

「死体増やしてどうするんだこのハゲ！！ミニマム脳みそ」

ぷーぷーぷー………切れたし、

だから始末の悪い大人は嫌いなんだ。

ム力ついたので寝ることにする。

2日後………

「おおい貴吾」

俺より先に蟻真大佐と鍋木W e c k l e が着ていたようだ香奈恵もいるなんかとてつもない面子だ。なんと言おうが喚こうがこのチーム高校生しかいねーし。

まあいいか突っ込むのもだるい。それに俺と鏡でも辛い物があるアメリカが行った事ねえな

……飛行機で19時間流石に疲れた。

今日はホテル言って寝よう。

と思った矢先に香奈恵さんがとんでもない事を言い出した。

「ねえ現場見に行こう」

馬鹿じゃねえのもう疲れたから明日にしとけて  
結局見るだけ見る事になった。

辺りを爆音が包むやばいなこんなに早く出てくんやよ

鎚木と蟻真は戦闘慣れしてるから大丈夫だがこの嬢ちゃん  
何にも解ってない。その場に立ち竦んでいる。

「バカ！！伏せろ！！」手を引つ張って体を引き寄せる。

蟻真と鎚木はすぐに俺と同じ考えを示してくれた。

とにかくここから逃げるそれが最優先事項だがどうやって逃げるか  
が問題だ。

WINGで飛んでいくのは相手にすぐ気付かれる。

「ステルスで行こう」蟻真が言った。

「そうしよう」

すぐにステルスの構築式を立て発動させるだが一足遅かった。  
合成神に見つかった。

ヤバイやばいやバイyabaiどうする。

「airbrast」突然後からとんでもない威力の攻撃系理分再  
術を展開する声が聞こえた。

仕方なく第三級理分再術風の防御円を発動して回避する。

それでも少し吹っ飛ばされた「airbrast」は風の理分再術  
と呼ばれ風を起こす術としては最強それに対し俺の風の防御円はそ  
れをほぼ無効化するにも関わらずそれを吹っ飛ばして俺に干渉して  
きた。

「Are you OK?」と 後から先ほどairbrastを  
打ったと思われる金髪の女が聞いてくる。

「デメエふざけてんのか殺す気がそれとも助ける気がないのか」はつきり言ってどっちも

一緒だと思いが香奈恵はありがとうとお礼を言っている。

まあ結果的に助けられ手分けだが日本語でお礼言っても解んないだるまあいいかと金髪の女が「あんた助けて貰つといてその態度何？」と日本語で悪態をついてきた。

何で日本語？しかも達者だし何か江戸っ子っぱいかも「あんた日本語出来たのか？」

何が何だか訳解らん。まあいいか？

「て言うかあんた誰？」

「あたしはリサ・スティングレー今回あれを殺す事を国際理分再術協会に依頼された。そう言うアンタこそ誰？」

その名前を聞いた事があつた。

リサ・スティングレーはアメリカスで有名な理分再術師でまた風の錬金術師とも言われるほどの風使いでもある。

「これは失敬。俺は翔風貴吾へえアンタが有名な風使いさんかい話によく聞くよ。」

「アアアンタみたいのが世界最高の理分再術師、翔風貴吾？嘘よ絶対嘘そんなこと言つたつてバレバレよだいたいシヨウナギは日本に居るはずだものこんな所にいるわけないわ！！」

なんて取り乱している。

「本当に俺は翔風だココへはU.Nの依頼で来たがもう必要ないだろう。」

「じゃあ本当の本当にシヨウナギなのね？キヤーキヤーどうしましように本物に会つちやつたああああのう好きです付き合つて下さい。」

「何言つてんのアンタ」

後ろから香奈恵の声がした。

「さつきから黙って聞いてたら何なの？いきなり貴吾はねア・タ・シ・ノなの」

は？なんか話が見えないんですが？

『何でも良いが鏡変わってくれ』

「お前らしい加減にしとけ」

鏡が言うがお構いなし。

鏡が指を鳴らすと風が舞い上がった。

ちなみに鏡はもともと伝説クラスの剣だから魔法が使えたりす。

しかし理分再術が発展した現代においてその魔法と同じだけのいや似ていることが出来る。

「airbrast」が良い例である。指を鳴らすと風が起こるの科学的に風を起こすのかと言うだけである。

つまり神秘は神秘では無くなり魔法は魔術になった。

先ほどの風で収集がついたようだ。

「生憎この体は一人の体じゃないんでね」

何でも良いがなんか妙な言い回しである。

「ええー一人の体じゃないー!?」

二人は息ピッタリに言う。そっぴや二人は知らなかったんだっけ？

まあ良いや。

と後ろで爆発音がした。

「な、何？」

またも二人は息ピッタリ。実は仲良いんじゃないだろうか？

しかし俺の想像は遙かに「airbrastだ」と「何て事だ。何か量産型EVANGOLION？」

白くて気持ち悪いのがairbrastを放ってきた。

鏡は左手を翳すだけでairbrastをかき消した。こいつ神か？強すぎる。airbrastはリサの

それより遥かに強い。

いくら何でも格が違いすぎる。俺のイメージ「強い」から「やばい」になるのは言うまでもないな。

さらに白EOAはロングスの槍の様な槍を錬成し投げってきた。しかしまたも左手を翳すだけでかき消した。

次の瞬間白EAはバラバラになっていた。

干渉不可領域・・・それが鏡の能力の一つアヴァロンたるエクスカリバーの鞘の能力。

しかし無敵と言う訳じゃあるまいに。

暴れてくれたおかげで残っていた施設の残骸まで吹き飛んだ。調査もクソも無い。「帰るか」鎚木達に言っただけでその場を後にしようとする。リサがホテルまで来ると言い始めそれに香奈恵が反対したことでまた問題が拡大していく。

「二人はほつといて帰るか？」鎚木達を引っ張ってその場から逃げ帰った。

（香奈恵は後で拾って帰った。）

まあ明日にはまた日本で学校に行っているだろうし。

リサからはなんとか逃げきった。

それにしても何だったんだあの白い奴。鏡が俺の思考に割り込んでくる。

「さあ知らん。ただ仲間で無い事は確かだ。」

そう。コレは仲間にはなり得ないと、謎の残骸を手に考えていた。

翌日学校に来ているわけだが何にも面白くない。

知っている事を言われても困る。それにこの分野は俺が開拓したんだし。馬鹿教諭が『ここ理解していますか？』なんて言っている。しかもこの俺に対して。

「あの〜先生言っている意味が分からないのですが？」

「だからここはだな・・・」

「そうではなくて俺に向かって『理解していますか』とは？何ですか？はつきり言っただけあなたの説明の方が分かりにくいのですか？」

『教師に向かって何ですかその口のききかたは？』

ムカつくなこいつ。

「ですからテーマみたいな三流理分再術師に教えていただくような事一切はないのですか？」

『な、何ですとでは教科書P154の水の合成を試みなさい』

「やりましたか？」ノータイトムで合成をやったのけた。

ついでに教師の宝具を分解してやった。すると「airbrast  
!」と言う声と共にairbrastが放たれてきた。

「先生、風の防御円発動した方が良いですよ」

少し忠告が遅かった。ってゆーか自分で気づけよって感じ。馬鹿教諭は分解してある宝具で風の防御を発動しようとしたが呆気なく吹き飛んで行った。

『それにしても今のはリサ並みの威力だったな』なんて鏡がいつてくる。

「リサア？そんな事有るわけ無いっしょ」

「貴吾あ!!」

ドカツ

潰された・・・何かに。

「何しに來たりサ・スティングレー」

「やあだあ『リサ』でいいわよう」

バシバシ

・・・たたくな

「何しに來たつて貴吾に会いに來たつてゆーかあ結婚したいって  
いうかあ」

うるさいマジで

「ななな何だ君は」

弾き飛ばされた馬鹿教諭がリサに何か言っている。

『リサに殺されんぞ』と鏡も言っている、全くだ。案の定リサは怒っている。

「あんた誰？誰に物言ってるか解ってるわけ？だいたいさっき貴吾に何か文句付けてたでしょ？あんたみたいなド三流が気安く話して  
良い人じゃないの。分かる？」

「ななな何ですと？三流？私が？ほほうではコレでどうです。」

何故か腰からもう一個宝具を取り出した。

「It shines・Spear of death」

輝く死の槍。この三流見境無くなつたな。マジでうーぜー。この業

は一流の攻性理分再術師でもミスると言う超激爆ムズの術なのだ。そうそう白E○Aが投げてきたのもコレである。

しかし意外なことに成功してリサに襲いかかる。

仕方ない。

『鏡、頼むよ』

『任せろ』答えると鏡はairbrastの発動詠唱を始めた。

「It renders and breaks and the limitation of the god's of the wind power is carried out with the storm until the fate be comes that there is nothing・airbrast」

死の槍は簡単に砕け散り教師は遙か彼方に吹き飛んでいった。さよなら二度と戻ってくるな。

「ってゆーか鏡お前いつの間にairbrastが使えるようになったんだよ」

『この間リサが詠唱してるの聞いて覚えた』

うーぜーうーぜーマジで。てゆうか一回だけじゃん詠唱したの。勘弁してくれよ俺使えないんだから。

「でもさでもさおかしくない？俺たち脳共有してんだから何で俺使えないわけ」

『さあ知らん』

まあ良いかそのうち使えるようになるだろ

ふと時計をみると既に授業は終わっていた。ちなみにうちの学校はチャイムが鳴らない。

ホームルームも終わったんで今日はパンチングマシンでもやりに行くか。

最近パンチングマシンにハマっている始めた頃は145kg、今は213kg二ヶ月ほどで68kg位あがっている。

どうしようもない友達からは「人外」「鬼」など妙なあだ名がつけ

られた。

むかちくのら・・・。

基、ム力つく。まあなんだか強い事は強いらしい。

まあ最近やりすぎで肩や腕の筋肉がイカレ始めた。

少し控えよう。うん。

すると目の前にえらくがたいの良いオヤッサンが立っていた。

「アンタが翔風だな来てもらう」

「やだと言ったら？」

「力ずくだ」

「ヤナこったクソ爺が」

ドカン

コンクリが割れた。バカ力が。

一発食らったら終わりだな。

「喰らえ小僧」

しまった後ろに・・・

気がつく俺は

「倉庫？」

訳の分からん建物にいた。手足も縛られていない。

まあ良いや俺を誰だか知ってる以上理分再術封じがされているだろう。

一応試してみるか。

「その運命尽き果てるまで、風神の力の限りを尽くさん碎けその暴風を以ってairbrast」

さつき作ってみた日本語詠唱「airbrast」まあね即興だから出なくても良いんだけど壁はあっさりと崩れた。

あり？

なして？

まあ良いや脱出と

前から白E〇Aの大群が



『鏡、交代』

『・・・』

『鏡、ふざけてないで早く交代しろ』

『・・・』

『鏡？・・・おい鏡どうした？返事しろ！！』

「鏡はもう居ないよ」

前から声がした。

「あ？テメエどこのどいつだ？」

「知る必要はないよ君はこれから死ぬんだから」

「そうはいくかよ！！」

「人の世の情も無く、喜びも悲しみも意のままにして弄ぶ

誇りたかく、健やかなる運命は、ついに我が物にあらず、われならず、望みわれならずなす術も無く汝がつかき仕打ちに身をさらすのみ 望みを失い躊躇わず弦を鳴らし悲しみを歌え運命の強き一撃は力ある人すら打ち砕くが故に・・・fate thousand  
arrow」

俺を誰だと思つてやがる。

理分再術師翔風貴吾だ！！

「ふざけんじゃねえ俺は・・・俺は翔風貴吾だー」

白E○Aの大群は一瞬で消し飛び後にはあの男が残っていた。

「で？誰が死ぬんだって？」

「君だよ翔風貴吾。ほらきたよ」

「なっ」

後ろに何やら人影が「airbrast」

「なんだと」リサだなんでそれだけではないさらに後ろには坂田、

摘木、蟻真、三島、青柳、仲里坂牧、坪口、宮良、森谷や何かを含め学校の連中がいた。

「形勢逆転って言う訳じゃ無さそうだ」

「寧ろ君は追いつめられているんですよ。翔風。」

ちっ舐めた真似を。

「貴吾あ使って」

キイインコンクリートに剣が突き刺さる。

「香奈恵。ここから全力で逃げる。ここにいると操られちゃう」

「うん分かった貴吾必ず帰って来る事」

「分かった」

さてまた面倒な状況だ。

一斉に襲いかかってくる。

「親玉を潰した方が勝ちだ。おいテメエ鏡は死んだのか」

「はい。君の代わりに」

「そいつはよかった楽になったな」

「・・・何をするつもりですか？今後に及んで」

「テメエ俺を誰だと思ってやがる。世界で唯一人体錬成をやつてのけた男だ」

あいつの誤算俺は魂単体で蘇らせることが可能であること

「行くぞ鏡。孤高の戦士はここで安らかなる死を遂げ

幾千の星の輝きと共に再び戦場を駆ける力を蓄え多くの聖人の力を  
借りここに復活せん・・・Revival Soul」

キイイン

黄金の剣が共鳴する。

「殺気だと翔風とは比べ物にならん。」

「おいオッサン貴吾をよくもやりやがったな死んで貰うぞ」

鏡の殺気は膨大だったその辺り一帯が全て鏡の”セカイ”に成った  
かのように包み込んでいた。

「まだまだ私の人形は行けるよ」

「何がどうできるって？」

シニクサレゲドウガ

the death which lives in the  
end of this world - - lend and g  
ive a sickle and self - - there  
fore, the self to which self d  
oes not render a limitation to  
destruction with you - - an in  
fernal gate - - striking - - car  
rying out - - a fool - - death s  
cythe

怒りに満ち満ちた鏡の術が男の皮膚、筋肉、骨、脳、臓器。を全て  
分解していく。

death scythe

死神の力を行使できる唯一の神秘正に魔法なのである。

コレを使われた者はどんなに致命傷でもどんなに痛くても気絶する  
ことを許されず最後の肉片が消え去るまで死ぬこともさえできない。  
「帰ろう香奈恵が待ってる。」

鏡は言って貴吾と入れ替わった

「あゝあ、やりてゝ」なんて事を考えつつ帰路についた。

咎人の翼序章 完

## 二人の俺（後書き）

この小説を読んでいたいてありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3399c/>

---

咎人の翼～序章～

2010年12月21日02時43分発行